

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY

2025.3
No. 779



※ P6105 参照



※ P6106 参照



※ P6115 参照

目次

[巻頭言]

監事就任にあたって

監事 吉貴 寛良 6103

[大学の動き]

- 理事補が発令される 6105
- 「総合研究推進本部」創設の記者会見を実施 6105
- 名誉教授の称号を授与 6106
- 2024年度京都大学高大連携事業 大学院生等（学びコーディネーター）による授業を実施 6106
- 京都大学この会主催第3回講演会を開催 6107
- KuSuKu クリスマス会（親子イベント）を開催 6109
- 令和6年度キャリアデザイン研修を開催 6110

[部局の動き]

- 京都大学国際シンポジウム2024「アジアにおける地球環境学の教育・研究に関する国際シンポジウム：国際連携による人材育成のアプローチと今後の展望」を開催 6112
- フィールド科学教育研究センターとパナソニックホールディングス株式会社が、研究交流会を開催 6113
- 白眉センター創立15周年記念式典・シンポジウムを開催 6115
- 学術研究展開センター（KURA）振り返り会を開催 6116

[寸言]

卒業してからの京大とのつながり 安福 良直 6118

[随想]

医学研究所北野病院の歩み：
京都大学とともに100年

名誉教授 稲垣 暢也 6119

[洛書]

ドイツでの発見 福元 健之 6121

[榮譽]

- 伊藤公一朗 経済学研究科リサーチフェロー、井上飛鳥 薬学研究科教授、小俣ラポー日登美 白眉センター／人文科学研究科特定准教授が第21回（令和6年度）日本学士院学術奨励賞を受賞 6122
- 北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授と佐和隆光 名誉教授が第43回「京都府文化賞」を受賞 6123

[話題]

● 令和6年度広報連絡会を開催 6125



京都大学

所屬・職名については、行事開催時点のものです。

巻頭言

監事就任にあたって

監事 吉貴 寛良



このたび京都大学の監事を拝命し大変光栄に思っております。京都大学は自由の学風を持つ優れた教育研究機関であり、国際的にも高く評価されています。今後、国際卓越研究大学の認定により安定的な財務基盤を確立し、世界トップクラスの研究大学としての地位を揺るぎないものにするため、お役に立ちたいと考えております。

国立大学法人化から20年が経過しましたが、そのメリットを京都大学として十分に生かしきれているとは言えません。教員と職員の意識改革は道半ばであり、組織の壁が残っているのが現状です。特に、教員同士、職員同士、さらには組織間の連携不足が、改革を阻む要因となっています。

京都大学が真に世界水準の研究大学になるためには、これらの体質を変革し、全教職員が一丸となって風土改革と組織改革を進めていくことが急務です。

具体的には、教員と職員の間での情報共有や協力を促すシステムを導入し、互いの理解を深める取り組みが必要です。また職員同士のコミュニケーションを活発化させ、組織間の壁を取り払うことで、より柔軟な対応が可能になると信じています。これにより新たなイノベーションを生み出す土壌を築くことができるでしょう。

自由の学風を尊重しつつも、着実に進む改革を通じて、京都大学がさらに活力のある大学へと進化することを願っています。私もこのプロセスを支援し、共に成長していく仲間としての役割を果たしていく所存です。

実はここまでの文章は京都大学広報誌に掲載する監事の抱負を作成するよう Chat GPT4.0 に指示して出力されたものです。

昨年9月の着任以来、総長はじめ理事の皆様、部局長の方々との面談を重ねてきました。また監査活動として病院や子会社も含め、多くの部局を訪問させていただきました。改めて京都大学は多様で大きな組織であり、私が経験してきた企業とは活動の目的が大きく異なることを実感しております。そのため現時点では京都大学の全容や課題を理解したうえで、私が貢献できる分野について自信を持って語るができないというのが本音です。そこで生成 AI に作成を指示してみました。「国際卓越研究大学」というキーワードを入れたため少々辛口のコментарになっていますが、企業経営経験者が着任に当たった抱負とするには一応もつともらしい内容になっており、このまま掲載してもそれほどおかしくないかと思います。この内容に関して皆様はどう思われましたでしょうか。

世の中は今、すさまじいスピードで変化しています。生成 AI の登場は私たち人間の働き方を大きく変えていくことは間違いありません。監査の中で見てきたことの一つは、多くの教職員の方々が付加価値の低い処理業務に膨大な時間を費やしている現実です。大学にとってもっと

巻頭言

も貴重な資源である皆様の時間を、テクノロジーの力で全て付加価値を生み出す活動へとシフトさせることが喫緊の課題と考えます。

企業の経営を通じて学んだことは、「変化こそチャンス」ということです。見たことのない知の地平は可能性にあふれています。変化のまっただ中にある京都大学がさらに素晴らしい研究大学となるよう、是非皆様と一緒に汗をかかせてください。

[目次に戻る ↗](#)

理事補が発令される

補佐する理事	氏名	任期	
情報基盤担当理事	原田博司	令和7年3月1日～令和8年9月30日	(新任)

[目次に戻る ↗](#)

「総合研究推進本部」創設の記者会見を実施

2025年1月1日付けで創設した総合研究推進本部について、1月9日(木)に記者会見を行いました。

総合研究推進本部は、本学におけるあらゆる分野の自由で卓越した「知の創生」を支え、専門人材を含む教職協働により、研究活動の適切な分析に基づく戦略的な研究推進や体制強化を進める新たな次元の支援組織です。

また、2024年4月に創設した成長戦略本部とシームレスに連携することにより、学術研究の成果から社会価値・経済価値を創出し、大学基金の拡大につなげることで、さらなる学術研究への再投資を行う自立的成長モデルを構築します。

会見では、湊 長博 総長から本学の組織改革のビジョンを紹介するとともに、北川 進 理事・副学長、総合研究推進本部長から、本部のミッションや概要について説明を行いました。



記者会見の様子



記者会見で説明する湊総長

記者会見で説明する北川本部長

【関連リンク】

総合研究推進本部

<https://www.research.kyoto-u.ac.jp/>

成長戦略本部

<https://iac-kyoto-u-ac.studio.site/>

(総合研究推進本部)

[目次に戻る ↗](#)

名誉教授の称号を授与

2月1日付けで次の1名に京都大学名誉教授の称号が授与されました。

氏名	推薦部局
伊達 洋至	医学研究科

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)

2024年度京都大学高大連携事業 大学院生等（学びコーディネーター）による授業を実施

高大接続・入試センターでは、高大連携事業の一環として、全国の高等学校を対象に学びコーディネーター事業を実施しています。本事業は、本学大学院生（博士後期課程）およびポストドクターの協力を得て、全国の高校生を対象に研究紹介の授業を行うものです。高等学校における探究活動やキャリア形成等の支援、大学院生等への教育機会の提供を目的として実施しています。

今年度は66名の大学院生等による協力のもと、2024年9月2日～12月23日の期間中、出前(対面)授業およびメディア (Zoomによる) 授業を全国49校において実施し、延べ4,210名の高校生が受講しました。

受講した高校生からは「これまで触れたことのない研究分野について、高校生に身近な例を用いて説明して下さったので興味が湧きました」、「課題を見つけるステップや、そこから研究に発展させていく過程を知ることができ、探究活動に活かしたいと思いました」等の感想が寄せ



授業の様子 1



授業の様子 2

大学の
動き



授業の様子 3



授業の様子 4



授業の様子 5



授業の様子 6

られました。

授業を担当した大学院生等からは、「高校までの勉強と大学における研究の相違点として、答えが出るかすら分からない問いを探ることや、周りの人と議論しながら答えを探すプロセスの楽しさを伝えることができて良かった」、「今後も若い世代の科学への興味を育めるような活動に積極的に関わりたい」等の声が聞かれました。

高大接続・入試センターでは、今後も全国の高校生に向けてさまざまな高大連携事業を展開していきます。

【関連リンク】

2024年度学びコーディネーター事業 実施状況一覧

<https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/Learning-Coordinator-Initiative-2024-8d7636eb508e0a24a4abceb948f7400e.pdf>

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

京都大学ここのえ会主催第3回講演会を開催

「京都大学ここのえ会」(ここのえ会)は、本学出身の女性が学部や研究科の枠を超えて交流しながら、本学の男女共同参画推進事業や女子学生、女性研究者等への緩やかな支援を行う同窓会として2021年11月に設立されました。

2025年1月25日(土)に、東京にて第3回講演会を開催しました。同講演会は、ここのえ会を知ってもらうイベントとして、男女共同参画に興味のある本学関係者の女性であれば会員に

大学の
動き

限らず参加を受け付け、現地会場31名、オンライン18名が参加しました。

冒頭、浅山理恵 このえ会長（SMBCオペレーションサービス株式会社取締役副社長）から挨拶があり、このえ会の説明や、登壇者や来場者への謝辞が述べられました。

その後、江川美保 医学研究

科助教が「女性のライフステージを通じた心身の健康と自律への道」と題した講演を行いました。講演では、思春期から更年期に至るまで女性のライフステージによって変動する女性ホルモンと心の不調の関連について説明があり、特に、江川助教が取り組んでいる、「治す」医療から「整える」医療とケアについて詳しく述べられ、月経前症候群(PMS)や月経前不快気分障害(PMDD)に対する正しい知識と、薬物療法の有用性について医学的な知見から説明されました。会場では、参加者がうなづく場面や、感嘆の声を漏らす場面が何度も見られました。

講演会後は懇親会が開かれ、現地参加者の多くが引き続き参加しました。会場内では多くの参加者が会員・非会員の垣根を超えて交流し、講義に対するフィードバックやフェムテックへの期待、また、このえ会やこれからの本学の男女共同参画に向けた期待を語り合いました。

参加者からは、「非常に素晴らしい講演をありがとうございました。女性ならではのライフステージの変化について教えていただき、大変勉強になりました」、「さまざまな分野で活躍されているたくさんの方とお話できて有意義な時間でした」などの感想が寄せられました。



挨拶する浅山会長



講演する江川助教



会場の様子



懇親会の様子



集合写真

(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

KuSuKu クリスマス会（親子イベント）を開催

学童保育所 京都大学キッズコミュニティ KuSuKu(クスク)では、2024年12月22日(日)に、「KuSuKuクリスマス会（親子イベント）」を開催しました。

午前は、ギターの伴奏に合わせ、子どもたちがおのおの好きな楽器を使って演奏したり歌を歌ったりした後、オーケストラ奏者を招いた弦楽四重奏によるクリスマスソングメドレーを鑑賞しました。いつも子どもたちが遊ぶ遊戯室に弦楽器のハーモニーが響き渡り、大人も子どももしばし耳を傾けました。その後、子どもたちがタクトを振り、オーケストラの指揮者気分を味わいました。

午後は、サプライズでサンタがたくさんプレゼントを持ってKuSuKuを訪れるイベントを実施し、子どもたち一人一人にプレゼントを渡した後、ビンゴ大会を行いました。会場となったミニホールでは、「リーチ」や「ビンゴ」といった子どもたちの歓声があがりました。

その後、子ども向けにはバルーンアートづくりを、保護者向けにはKuSuKuの開所準備や開



クリスマス音楽会の様子 1



クリスマス音楽会の様子 2



サンタからプレゼントをもらう子どもたちの様子



ビンゴ大会の様子



バルーンアートづくりの様子



保護者向け報告会の様子

大学の
動き



クリスマスケーキを食べる様子

所から1年間の活動を写真や動画で振り返る報告会を行いました。最後に参加者全員でケーキを食べ、一足先にクリスマス気分を満喫することのできる親子イベントとなりました。

【関連リンク】

学童保育所 京都大学キッズコミュニティ (KuSuKu) - 京都大学男女共同参画推進センター

<https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/community/>

(人事部 (職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)

令和6年度キャリアデザイン研修を開催

今後のキャリアプランを描くことや、キャリアアップへのモチベーション向上などの観点から、京大職員として働くうえでのヒントを得る機会として「令和6年度キャリアデザイン研修」を2025年2月7日(金)に開催しました。

本研修は3部構成で行われ、まず株式会社フェニクシー社外取締役の村井暁子 先生によるワークショップで幕を開け、ご自身の充実度グラフ(人生においてどの時期にどんな仕事をして、その時の充実度はどの程度だったかをグラフで示したもの)を共有しつつ、キャリアに対するさまざまな考え方についての話がありました。参加者も自身の充実度グラフをグループ内で共有し、意見交換を行いました。続いて、CFOオフィスの野田稔貴 オフィス長と人事部職員育成課ダイバーシティ推進室の中植由里子 室長が登壇し、それぞれの充実度グラフを題材に自身のキャリアについて熱い想いを語りました。村井先生、野田オフィス長、中植室長、野崎治子 理事とのグループセッションでは、これまでの内容を踏まえた日頃の疑問やキャリアの悩みを参加者が直接質問し、アドバイスを受けました。



村井先生によるワークショップの様子



グループセッションの様子

大学の
動き

本研修は、京都大学キッズコミュニティ KuSuKu を会場としたことにより、普段の職場環境から離れた空間でリラックスした雰囲気の中、自身のキャリアとじっくり向き合うことができ、参加者自身のキャリアデザインを考えるうえで非常に有益な機会となりました。

人事部職員育成課では、今後も参加者にとって実りある研修を提供してまいります。



集合写真

(人事部 (職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)



京都大学国際シンポジウム 2024「アジアにおける地球環境学の教育・研究に関する国際シンポジウム：国際連携による人材育成のアプローチと今後の展望」を開催

京都大学国際シンポジウム2024「アジアにおける地球環境学の教育・研究に関する国際シンポジウム：国際連携による人材育成のアプローチと今後の展望」を、2024年12月3日(火)に、カンボジアのプノンペンにある王立農業大学を主会場にハイブリッド形式で開催しました。アジア諸国を中心に、22カ国48組織から、研究者や学生、民間企業関係者など合計360名が参加しました。

シンポジウムは、湊 長博 総長、田中千尋 地球環境学堂長、Ngo Bunthan 王立農業大学長、小林広英 地球環境学堂教授(国際シンポジウム部会長)による開会の辞から始まりました(一部オンライン)。続いて、西前 出 地球環境学堂副学堂長とHuon Thavrak 王立農業大学副学長による2本の基調講演が行われ、各大学におけるこれまでの研究活動と今後の展望や、学際的・国際的な連携による教育モデルについての話がありました。その後の若手研究者や学生による、Environmental Technology、Natural Resources、Global Ecologyの3分野のポスター発表や、質疑応答セッションでは、さまざまな討論が行われました。

午後からは、京都大学、王立農業大学、フエ農林大学、IPB大学、バンドン工科大学、ハノイ理工科大学を代表する研究者によるパネルディスカッションを行い、大学間連携による教育カリキュラムの強化に向けて活発な議論が交わされました。また、それぞれの研究室のプロジェクトの紹介を行い、相互の連携や共同研究の可能性を探る機会を提供するコラボレーティブセッションを実施しました。続いて、選考委員会により選出されたベストポスター賞の表彰式が行われ、田中学堂長から受賞者に賞が授与されました。最後に、Huon 副学長による閉会の辞が述



湊総長による開会の辞



田中学堂長による開会の辞



Ngo 学長による開会の辞



小林教授による開会の辞



西前副学堂長による基調講演



Huon 副学長による基調講演



パネルディスカッションの様子



べられ、本シンポジウムは閉幕となりました。

本シンポジウムは、学際的・国際的な人的ネットワークを強化し、教育カリキュラムの向上や国際共同研究の推進に向けた重要な機会となりました。また、若手研究者にとっては研究発表や交流を通じて新たな視点を得る有意義な場となり、今後の持続可能な未来に向けた協力の基盤が築かれることが期待されます。



現地参加者集合写真 1



現地参加者集合写真 2

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)

フィールド科学教育研究センターとパナソニック ホールディングス株式会社が、研究交流会を開催

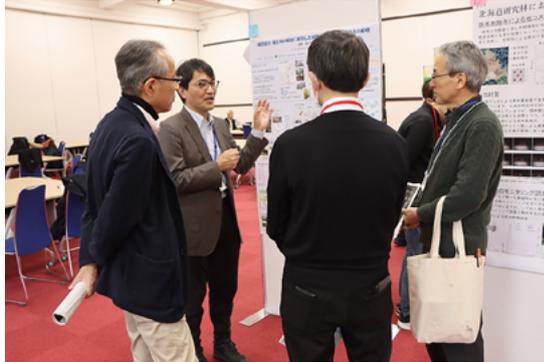
フィールド科学教育研究センターとパナソニック ホールディングス株式会社は、2024年12月19日(木)に、百周年時計台記念館国際交流ホールにて研究交流会を開催しました。パナソニック社員、フィールド科学教育研究センター教職員、本学の大学院生から合計48件のポスター発表があり、約90名が研究交流会に参加しました。

最初に、館野隆之輔 フィールド科学教育研究センター長の開会挨拶があり、続いて各発表者が1分間の研究紹介をした後、3グループに分かれてポスターセッションを行いました。微生物の多様性、地域デザイン、持続的な森林資源管理・活用手法、魚類やプランクトンの群集構造、水中ドローンの活用、環境DNAによる魚類モニタリング、海産無脊椎動物の多様性、気候変動と沿岸漁場環境、森里海連環学、パナソニック共存の森(滋賀県草津市)におけるデータ計測、パナソニック人工嗅覚センサシステムの開発など、幅広い研究テーマのポスターを掲示して、約3時間かけてディスカッションを行いました。ポスターの前では、参加者が熱心に議論する様子が見られ、お互いの研究を知るとともに、新たな研究テーマの発掘につながる流れが

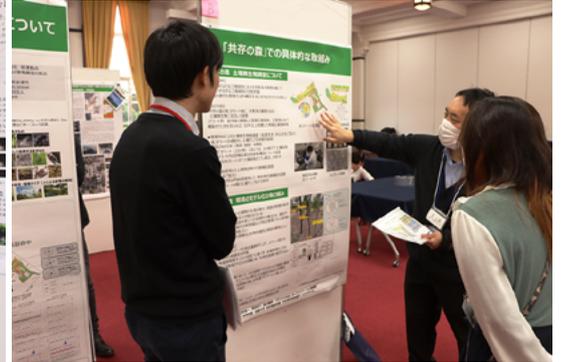
部局の
動き

生まれました。

最後に、素晴らしい発表をした大学院生1名へパナソニック特別賞が授与されたあと、小川立夫 パナソニック ホールディングス株式会社 グループCTOから閉会挨拶があり、研究交流会は盛況のうちに終了しました。



ポスター発表（京都大学）



ポスター発表（パナソニック）



熱心に議論する様子



パナソニック特別賞を授与された大学院生



集合写真

【関連リンク】

京大フィールド研×パナソニック「研究交流会」12月19日開催 - 京大フィールド研

<https://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/blog/archives/38801>

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る ↗](#)



白眉センター創立15周年記念式典・シンポジウムを開催

白眉センター創立15周年記念式典・シンポジウムを、2025年1月26日(日)に、ホテルグランヴィア京都にて開催しました。

同センターでは、自由かつ独創的な発想で課題に挑戦する若手研究者を、学術分野を問わず世界中から募り5年間支援する、本学独自のプログラム「白眉プロジェクト」を運営しています。2009年9月に次世代研究者育成センターとして設立された後、2012年に現行の白眉センターへ改称し、2024年度に創立15周年の節目を迎えました。

今回の式典・シンポジウムには、湊 長博 総長や理事をはじめとした本学関係者、白眉プロジェクトの研究者のほか、センターの運営に関わる外部有識者、他大学の関係者など学外からも広く出席があり、約180名が一堂に会しました。

第I部では、湊総長、北川 進 理事・副学長の挨拶に続き、第25代京都大学総長で白眉センター設立を主導した松本 紘 公益財団法人国際高等研究所長、井上諭一 文部科学省科学技術・学術政策局長より祝辞がありました。

第II部では、白眉プロジェクトのOB・OGである研究者3名がおのおのの研究分野について、白眉センター在籍時からの研究の進展や今後の展望を見据えた講演を行いました。その後、「白眉センターの過去・現在・未来」と題し、白眉プロジェクトの研究者6名がそれぞれの想いを語り合う前半部分と、外部有識者も交えて同プロジェクトの意義と今後を見つめる後半部分に分けて、パネルディスカッションを行いました。

また、夕刻からは第III部として祝賀会を行いました。安藤慶明 公益財団法人高輝度光科学研究センター常務理事、中西友子 福島国際研究教育機構監事から祝辞が述べられた後、松本所長の乾杯により開会しました。学内外の関係者や白眉センターの研究者らが意見交換を行うとともに、旧交を温めながら15周年を祝い、盛況のうちに幕を閉じました。



湊総長による挨拶



北川理事・副学長による挨拶



祝辞を述べる松本所長



祝辞を述べる井上局長



前田 理 北海道大学教授(白眉プロジェクト第1期)による講演



アスリ・チョルパン 京都大学経営管理研究部教授(白眉プロジェクト第2期)による講演



鈴木俊貴 東京大学先端科学技術研究センター准教授(白眉プロジェクト第9期)による講演



パネルディスカッションの様子 1



パネルディスカッションの様子 2



集合写真

【関連リンク】

京都大学白眉センター 創立15周年記念式典・シンポジウム パンフレット
https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2025/02/Hakubi_15th-Anniversary-Brochure.pdf
 京都大学 白眉センター
<https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/>

(白眉センター)

[目次に戻る ↗](#)

学術研究展開センター（KURA）振り返り会を開催

KURAの関係者による「学術研究展開センター（KURA）振り返り会」が2024年12月19日（木）に国際イノベーション棟1階の linkhub@ で開催されました。

これまで本学の研究推進において重要な役割を果たしてきたKURAの機能は、2025年1月1日付で 総合研究推進本部 へ統合されました。KURAに所属していたリサーチアドミニストレーター（URA）は、より大きな枠組みの中で、引き続き本学の研究推進に取り組むこととなります。本振り返り会は、2012年4月の学術研究支援室設置に始まる本学のURA組織の歴史とKURAの成果を振り返るとともに、新たな総合研究推進本部への期待を語り合う場として開催

部局の
動き

されました。

第一部はワークショップ形式で行われ、これまでのKURAの活動を写真とともに振り返りながら、KURAがどのような組織であったか、また新しい組織へ継承したいKURAの強みについて話し合いました。研究者とのコミュニケーションを大切に、真に必要な支援を行うこと。フラットな人間関係のもと、ボトムアップの自由な発想で新たな挑戦を続けること。これまでKURAが大事にしてきた姿勢があらためて確認され、それらを総合研究推進本部へと引き継いでいこうという意識が共有されました。

また、話題は総合研究推進本部に対する期待や今後の目標へと広がり、「事務職員との連携を深め、さまざまな壁を取り払うことで、本学の研究者が自由で多様な発想に基づく研究をより円滑に進められるよう支援したい」といった意見が交わされました。

第二部は午後5時15分より開始され、KURAが誇るミュージシャンたちによる演奏を楽しみながら、思い出話に花を咲かせました。会議室とは異なるlinkhub@の開放的な雰囲気の中で、



振り返り会の様子

参加者の会話がより弾み、和やかなひとときとなりました。

(総合研究推進本部)

[目次に戻る ↗](#)

卒業してからの 京大とのつながり

安福 良直



「数独」などでおなじみのパズル専門出版社ニコリの代表を務めている安福です。いきなり実は…、という話をしてしまうが、京大卒業後25年くらいは、京大卒であることにより思いを抱いていなかった。数学の研究がしたくて京大に入学したものの、学問への情熱は早々に失せてしまい、趣味のパズルにハマりすぎたあげく、パズルの会社に押しかけ入社したのが実情。ちなみに、数独が世界的ブームになってニコリが脚光を浴びるのは、入社から約15年後のこと。当時はまだ、将来があるのかどうかもわからない世界に飛び込んだのだ。

私はニコリ入社後、パズルを作ったり、解いたり、本の編集をしたりの日々が長く続いた。数独は2004年の末に、ニュージーランド人の数独ファンがイギリスのタイムズ紙に売り込んだことがきっかけで世界的ブームになり、ニコリも一時期は業績が上がったが、それも長くは続かず、ブームが落ち着くと業績も下降線。その頃に私は現場のパズル編集者から、取締役として経営に関わる立場になった。

しかし、現場を熟知していても経営は未経験。社内で経営を教えてくれる人もいない。何をすればいいのかわからない。そのとき、東京で京大出身者による「丸の内交流会」が開催される、という情報が飛び込んできた。とにかく社外に飛び出しているいろんな人と会う機会を持たねば、と考えていた私には、絶好の機会に思えた。

「とにかく、参加してみよう」と、年に数回開催される交流会に参加し続けた。交流会は、京大出身者による講演会と、懇親会の二部構成。どちらも、それまでパズルの世界しか知らない私には新鮮だった。特に、懇親会で出会った方々の話は、経営に直接関係ないことでも役立ったし、そのうち私を応援してくれる人まで現れるようになった。珍しいことをしている会社なので、興味を持たれたのかもしれない。

丸の内交流会と前後して、京大では数学教室の同窓会が発足。その第1回に出席したのが、実は卒業以来20数年ぶりの京大訪問だった。当時、それだけ京大とは疎遠になっていたのだが、同窓会には温かく迎え入れていただいた。会の中で数独についてスピーチする機会をいただいたし、教授を含めていろいろな方と話すことができた。

丸の内交流会と数学教室の同窓会、この2つでいろいろなことを学び、京大のありがたさ、温かさを感じることができたと思っている。私は2021年にニコリの社長になったが、それからどうにか経営者としてやっていけているのは、京大のおかげだと言っても過言ではない。在学中にもっと学問に勤しんでおけばと思ったこともあるが、卒業してからも京大とつながりを持つことは大切なんだと思う。

(あんぷく よしなお、株式会社ニコリ代表取締役社長、平成3年理学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

医学研究所北野病院の歩み：
京都大学とともに 100 年

名誉教授 稲垣 暢也



私は2022年9月末に京都大学を退職し、公益財団法人田附興風会の理事長に着任した。田附興風会医学研究所北野病院は大阪梅田から徒歩圏内の好立地に位置する病院である。田附興風会は今年で創立100周年を迎え、現在様々な企画を進めているところであるが、京都大学とも非常にかかわりが強いので、この機会に紹介したい。

大阪の実業家である田附政次郎氏は、京都帝国大学医科大学附属医院（現在の京都大学医学部附属病院）で治療を受け快癒されたことから、京都帝国大学に多額のご寄付をされ、「医学に関する総合研究を行い、もって学術、科学技術、文化の振興・発展に寄与すること」を目的として、1925年に財団法人田附興風会が創立された。そして、「最高の医療を大阪の地に」という田附氏の思いで、1928年に医学研究所ならびに同附属北野病院が現在の地に設立された。

開院式において式辞を述べられた京都帝国大学荒木寅三郎総長が揮毫され田附氏に贈られた書が現在も北野病院の応接室に飾られている（写真）。そこには、「儉以て徳を養う」という諸葛孔明の誠子書の一文が書かれている。

このように、京都大学と特別深い関係にある北野病院であるが、設立当時、京都大学医学部の現役教授が、理事や病院長を兼務し、さらに各診療科において現場の指導を行うなど、京都大学と一体となって運営がなされていたことは驚きである。最近まで京都大学医学部長が理事長を兼務され、現在でも、私と医学部長の二人が財団の代表理事を務めるなど、京都大学との深い関係は依然として続いている。

北野病院との関係は医学部だけではない。創立当時の北野病院は、京都大学工学部建築科の森田慶一先生（当時は助教授、のち教授）がモダンで重厚なドイツ流の病院を参考にした設計をされた。森田先生は、京都大学の楽友会館や基礎物理学研究所湯川記念館を設計されたことでも知られている。

設立後は、第2次世界大戦後に進駐軍により接収されるなど、様々な苦難に遭遇しつつも、京都大学医学部ならびに同附属病院との密接な協力のもと、最新かつ最良の医療を地域の皆



随想

さんに提供し続け、現在では病床数685床、職員数約1,700人の全国屈指の大病院に発展することができた。これも先人のご尽力と、地域の方々のご支援と、そして京都大学の強力なバックアップのおかげであると、100年の節目に改めて思う次第である。

京都大学とともに、これからもさらなる発展に尽力したい。

(いながき のぶや、令和4年退職、元大学院医学研究科教授、
専門は糖尿病・内分泌・栄養内科学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

ドイツでの発見

福元 健之



世界的な電機メーカーであるシーメンス社のヘルスケア部門は、2025年1月現在、シーメンスヘルシニアーズ社（日本法人の名称は、シーメンスヘルスケア株式会社）として分社しています。その拠点はドイツのエアランゲンにあり、当地で19世紀に創業したライニガー＝ゲッバート＝シャル社がシーメンス社（当時はシーメンス＝ハルスケ社）によって丁度100年前に買収されたことに背景があります。日本ではあまり知られていないかもしれませんが、エアランゲンは医療技術史のなかで重要な位置を占めており、私は、昨年12月にシーメンス＝ヘルシニアーズ社の資料室を訪問しました。

本学の文学研究科に提出した学位論文をもとにした拙著『医師の「献身」——ポーランド建国と草の根知識人1890-1920』（京都大学学術出版会、2024年3月）を上梓した後、私は、戦前のポーランドでの結核治療に関して調べています。エアランゲンを訪問したのは、その過程で、ポーランドの医療がドイツ企業の技術に支えられたと気づいたためです。ポーランド各地で購入されたシーメンス＝ハルスケ社製のX線装置の性能などに関する史料を入手することができ、有益な調査滞在となりました。

しかし、予期しなかった発見もまた実地でのみ味わえる愉しみの一つです。事前に計画していた史料の複写が片付き、周囲の書棚を眺めると、ふと1937年にルネ＝デュ＝メニル＝ド＝ロシュモンが執筆したドイツ語の『放射線療法入門：学生および医師のための教科書』が目にとまりました。手に取って目次を見たところ、思わず声が出ました。本の主題からして、X線やラジウムなどの放射線を扱う章があるのは当然ですが、その前に、赤外線や可視光線、紫外線を扱う章があったのです。つまり、少なくともこの文献を読む限り、「放射線療法」が意味する範囲は今日よりも広く、赤外線や可視光線、紫外線を利用する光線療法と、狭い意味での放射線療法とが同一の枠組のなかにあったようです。

いまの研究テーマに着手した当初、私は、結核の光線療法に関心を持っていました。太陽光の健康効果が信じられた戦前は、日光療法に並んで、太陽光を人工的に模倣した光源による光線療法が発展した時代で、だからこそ私は、民間療法じみた気配すらある光線療法に焦点を当て、医療・技術・自然の歴史的関係について考察することを計画しました。しかし、ドイツでの発見は、研究枠組の再考を迫っているように思えます。光線療法は単独で扱われるべきものではなく、それと放射線療法を包括するより広い枠組が必要なのかもしれません。結核の治療に光線療法も、放射線療法も活用されていた当時の状況を考慮すれば、なおさらです。

研究の新しい局面に立つと、いつもわくわくします。そして、このテーマで先に進むためには自然科学の専門家からの助言も欠かせませんので、この広報誌をお読みで、一緒に研究していただける方は、ぜひご連絡いただけましたら誠に幸いです。

（ふくもと けんし、大学院人間・環境学研究科准教授、
L-INSIGHT フェロー、専門は西洋史学）

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

伊藤公一郎 経済学研究科リサーチフェロー、井上飛鳥 薬学研究科教授、小俣ラポー日登美 白眉センター／人文科学研究科特定准教授が第21回（令和6年度）日本学士院学術奨励賞を受賞

このたび、伊藤公一郎 経済学研究科リサーチフェロー、井上飛鳥 薬学研究科教授、小俣ラポー 日登美 白眉センター／人文科学研究科特定准教授の3名が、第21回（令和6年度）日本学士院学術奨励賞を受賞しました。同賞は、優れた研究成果をあげ、今後の活躍が特に期待される若手研究者に対して与えられるもので、日本学術振興会賞を受賞した研究者の中から6名以内が選ばれるものです。

■伊藤公一郎 経済学研究科リサーチフェロー

伊藤リサーチフェローは、2004（平成16）年京都大学経済学部卒業、2005（平成17）年にブリティッシュ・コロンビア大学大学院経済学修士課程修了、2011（平成23）年、カリフォルニア大学バークレー校にて経済学の博士号を取得しました。同年からスタンフォード大学経済政策研究所研究員、2012（平成24）年から京都大学経済学研究科のリサーチフェロー（現職）、2013（平成25）年にボストン大学ビジネススクール助教授、2015（平成27）年にシカゴ大学ハリス公共政策大学院助教授、2019（令和元）年から同大学准教授、2024（令和6年）から同大学教授となり、現在に至っています。



今回の受賞題目は「地球環境問題に関する理論的および実証的経済学研究」です。

■井上飛鳥 薬学研究科教授

井上教授は、2004（平成16）年に東京大学薬学部を卒業、2006（平成18）年に東京大学薬学系研究科の修士課程を経て、博士課程在籍中の2008（平成20）年に東北大学薬学研究科助手、2014（平成26）年に東京大学にて薬学の博士号を取得しました。同年に東北大学薬学研究科助教、2016（平成28）年に同准教授、2022（令和4）年に同教授、2024（令和6）年には京都大学薬学研究科教授と東北大学教授を併任（クロスアポイント）し、現在に至っています。



今回の受賞題目は「Gタンパク質共役型受容体のシグナル多様性の統合理解と選択的操作」です。

栄誉

■小俣ラポー日登美 白眉センター／人文科学研究所特定准教授

小俣准教授は、2003（平成15）年に東京大学文学部卒業、2005（平成17）年にストラスブール大学大学院D.E.A課程、2007（平成19）年に東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了、2016（平成28）年にフランス国立高等研究実習院にて宗教文献学の博士号を、同年にフリブール大学にて歴史学の博士号を取得しました。2021（令和3）年より、京都大学白眉センター／人文科学研究所特定准教授となり、現在に至っています。

今回の受賞題目は「近世から近代にかけてのカトリック文化圏における日本人（特に殉教者）像の形成と波及の歴史的過程の分析」です。



【関連リンク】

日本学士院学術奨励賞の受賞者決定について | 日本学士院

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2025/011401.html>

（渉外・産官学連携部（広報課））

[目次に戻る ↗](#)

■北川進 理事・副学長、高等研究院特別教授と佐和隆光 名誉教授が第43回「京都府文化賞」を受賞

このたび、北川進 理事・副学長、高等研究院特別教授と佐和隆光 名誉教授が、第43回（令和6年度）京都府文化賞特別功労賞を受賞しました。同賞は、京都府により1982（昭和57）年度に創設された賞で、京都府における文化の振興と発展を図るため、京都文化の向上に寄与した者へ贈られます。

■北川進 理事・副学長

北川理事・副学長は、環境・資源問題に革命的な変化をもたらす材料として注目される「PCP／MOF（多孔性配位高分子）」の研究を行い、世界で初めてPCP／MOFの無数の孔に大量の気体を取り込めることを立証したことなどが評価されました。



栄誉

■佐和隆光 名誉教授

佐和名誉教授は、「計量経済学」で世界的な業績を上げ、地球温暖化対策の経済的影響を分析するなど、経済学者として実社会の課題に取り組んだ他、これからのビッグデータ時代を見据えた人材養成における先駆的業績が評価されました。



【関連リンク】

京都府文化賞／京都府ホームページ

<https://www.pref.kyoto.jp/bungei/bunkasho.html>

北川 進 特別教授の令和6年度京都府文化賞特別功労賞の受賞が決定しました | KUIAS 京都大学高等研究院

<https://kuias.kyoto-u.ac.jp/j/news/2025/01/0110>

(渉外・産官学連携部 (広報課))

[目次に戻る ↗](#)

話題

令和6年度広報連絡会を開催

広報課では、「学内の広報担当者の専門性向上と、広報担当者同士の横のつながりや連携の強化」を主な目的に広報連絡会を開催しており、今年度は計5回に、延べ334名が参加しました。

第1回は、広報を初めて担当する職員向けの業務講習会を行いました。基本業務の最新情報に加え、本学の動画ポータルサイト「KyotoU Channel」の視聴者の属性やアクセス数などの参考トピックも紹介しました。

第2回は、塩瀬隆之 広報担当理事補（総合博物館准教授）を講師に、参加者で広報に関する共通の課題について考えるワークショップを開催しました。グループワークを通じて、参加者が「伝える」と「伝わる」の意味を意識し直すなど、「原点に還ってコミュニケーションについて考える機会」となり、アンケートでは参加者全員が「大変有意義」だったと回答しました。

第3回は、過去の参加者アンケート等で、他部局の取り組み事例を知りたいという声が多数あったことを受けて、部局の広報担当者4名が事例を紹介しました。参加者からは、「向き合う課題や状況にも重なるところがあり、興味深く拝聴させていただきました」、「相当のご苦勞の上で成功されたことが伝わり、現状に満足せずに課題に向き合い挑戦していく姿勢を私も学ばせていただきました」、「グループ別情報交換会では、普段なかなか交流することのできない他部局の皆さまと交流させていただき、他部局や部署の取組を聞き刺激を受けました」という感想が寄せられました。

第4回は、広報課と学術研究展開センター（当時）との共催により開催しました。「SNSとは」というテーマで、広報課や同センターのほか、東南アジア地域研究研究所の広報担当者からSNSの活用事例について紹介がありました。「さまざまなSNSを使い分けている点、使い分けの方法などが示されて参考になりました」「事務本部からの情報提供や説明だけでなく、各部局からも情報を持ち寄って発表するという形式はとても良かったです。最後にざっくばらんにグループの方々と情報交換できたことも良かったと思います」との感想が寄せられました。各回のアンケートでは9割前後の参加者が「大変有意義」「有意義」と回答しました。

また、第5回では、法務室の弁護士からホームページやSNSに関する著作権や肖像権の注意事項について身近な事例を交えた講義がありました。参加者からは、「肖像権のお話で、同意書の取り方や写りこみの可能性がある場合の対処方法など、大変参考になりました」「具体例を織り交ぜながらだったので、分かりやすかったです」という感想が寄せられました。

広報課では、引き続き令和7年度も広報連絡会を開催して、各部局の広報担当者とのつながりを強化し、本学の広報活動の活性化を図っていく予定です。広報担当の教職員のみならず、広報活動に少しでも興味・関心がある方はぜひご参加ください。

なお、今年度の各回の内容は以下の通りです。

第1回

開催日時：令和6年5月29日 13時30分～15時（オンライン開催）

内容：広報実務講習

講師：広報課

参加者数：108名

第2回

開催日時：令和6年7月19日 15時～17時（対面開催）

内容：広報に関する諸テーマについて、参加者で共通の課題について考えるワークショップ

話題

講師：塩瀬隆之 広報担当理事補（総合博物館准教授）

参加者数：26名

第3回

開催日時：令和6年11月27日 13時30分～15時（対面開催）

内容：部局における広報の取り組み

講師：高等研究院（iCeMS）・遠山真理特定准教授、生存圏研究所・日下部利佳特定職員、桂地区（工学研究科）事務部・宮本裕佳主任、農学研究科・有田紗絵子掛長

参加者数：42名

第4回

開催日時：令和6年12月19日10時～12時（対面開催）

内容：SNSの活用について

講師：学術研究展開センター・渡辺真人URA、齊木あやURA、東南アジア地域研究研究所・伊藤ゆかり支援職員、川島淳子事務補佐員、鎌田京子教務補佐員、広報課

参加者数：40名

第5回

開催日時：令和7年2月14日13時30分～15時（ハイブリッド開催）

内容：「HP・SNS等での広報活動における著作権・肖像権に関する注意事項」

講師：道田旭彦弁護士、兵頭勇一郎弁護士、中島亜理沙弁護士

参加者数：118名



第2回広報連絡会の様子



第3回広報連絡会の様子

（渉外・産官学連携部（広報課））

[目次に戻る ↗](#)